

90年代における若者運動「だめ連」と

マスメディア

福井孝宗

Youth Movement "Dameren" in the 1990s and Mass Media

Takanori Fukui

はじめに

本稿は90年代に活動した「だめ連」についての研究である。「だめ連」は、1992年に若者が中心となって東京で結成した社会運動組織である。社会運動といえ、プラカードを掲げてのデモや、行政・企業に対して法的に働きかける市民運動などが一般的にはイメージされる。しかし、「だめ連」は、そのような方法を取らなかった。その運動と呼びがたい運動の性格のためか、「だめ連」自体の研究は、ほとんどなされていない。

毛利(2009: 164-165)では、ポストモダニズム思想・愚鈍な左翼・DiY文化の三つを軸にした「ストリートの思想」が2000年以降明確な運動の形として現れたとされ、「だめ連」の活動はその政治運動の先駆的な形式であったと述べられている。具体的には、松本哉率いる「素人の乱」や2008年の年末に行われた年越し派遣村などを指している。また、雨宮(2010: 30-46)では、それらの運動がプレカリアート運動と呼ばれ、「だめ連」は、それを先取りした運動であったとされている¹。しかしながら、どちらの研究においても「だめ連」は紹介程度に留まり、詳細な分析が加えられているわけではない。また、社会運動論の研究では、(大畑 2004:184)において、わずかながら言及されているものの、「だめ連」に焦点を当てるものではなかった。「だめ連」の全体像を描き、それを引き継いだと言われる2000年以降の運動と比較することで、90年代における若者を取り囲む特有の文化や時代背景を明らかにすることができるのではないだろうか。また、2000年以後の若者文化を理解する

¹ プレカリアートとは、イタリア語で「不安定な」という意味の *precario* とプロレタリアートを組み合わせた造語である。2003年にイタリアの路上で落書きとして見つかかり、使われるようになった。後期資本主義のもとで、パートタイムなどの不安定な労働に従事している人を指している。日本では2006年にフリーター全般労働組合が主催した「自由と生存のメーデー」で使われ、雑誌などでもしばしば言及されている。

手立てになるのではないだろうか。この連続と断絶を明らかにしたい。

「だめ連」の研究には、社会運動論の枠組みを利用する。現在の社会運動論において有力な潮流は2つあり、アメリカで発展した集合行動論に由来する資源動員論とヨーロッパのマルクス主義理論に由来するいわゆる「新しい社会運動論」の流れである。現在では両者に交流が見られるものの、80年代後半以前はほとんど別個に存在した²。しかし、この2つの潮流は相反するどころか、お互いに補いあうことができると考えられる。なぜなら、前者はなぜ運動が起こったのかを「説明」することに焦点を当てる理論であり、後者はその運動が何であるかを「解釈」しようと試みる理論であるからだ。両方の側面から「だめ連」について論じていくことで、その成立から衰退までを深く理解することができる。

「だめ連」の広がりにはマスメディアが大きな役割を果たした。テレビや雑誌などにしばしば取り上げられ、話題を呼んだのである。それによって「だめ連」へ動員される人数は大きく拡大した。しかし、メディアはどのように「だめ連」を取り上げ、影響を与えたのだろうか。その報道内容を検証し明らかにする。

「だめ連」のような運動は、社会運動論の中で運動と見なされていなかった。かつて社会運動は、政党運動・労働運動・女性運動・住民運動などしか意味しなかったのである。そこで、その概念の範囲を広げる必要性が、メルッチらによって主張され、若者の逸脱と見なされたような行為は運動論の中に位置づけられることになった(Melutti 1989:69-74)。しかし、日本で戦後から70年代にかけての学生運動以外に、若者による運動の分析を社会運動論の文脈において行ったものは見受けられない。

第一章 「だめ連」の解釈

1節 「だめ」とは何か

一般的に「だめ」という言葉は、役に立たない状態や悪い状態を広く指す意味で使われているが、「だめ連」では、特有な意味で使われている。「だめ」は「家族・学校・会社・社会・国家から「だめなヤツ」と言われる可能性のある事柄一般の総称」(神長恒一 1999a: 7)とされている。その具体的な内容は、「もてない、お金がない、仕事がない、仕事が続かない、やる気が出ない、そしてコミュニケーションがうまくいかない」(道場親信 1999: 242)ことなどを指している。一般的な使い方よりも、社会的な地位やスキルに関わるニュアンスを強く含んでいるのである。そして、「だめをこじらせる」とは、「自分の「だめ」を過剰に意識してしまいネガティブな志向しかもてなくなったり、逆に自分の「だめ」を直視できず人生の一発逆

²資源動員論とその流れについては、塩原勉編(1989)・片桐新自(1990)を、「新しい社会運動論」とその流れについては伊藤るり(1993)・梶田孝道(1988)を参照のこと。

転を狙ってかえって悪循環におちいり、結果として孤立・自滅していく状態」(神長恒一 1999a: 7)になることである。「だめ連」は、この「だめをこじらせる」ことを、まず問題として掲げている。

2節 「だめ連」の構成員

「だめ連」の構成員を、はっきりと定義するのは困難である。「だめ連」と深い付き合いがありながらも「だめ連」メンバーでないと主張する者がいる上に、明確なメンバーシップがあるわけでもない。また、他の組織として「だめ連」と共に活動するグループが多く存在するのも、その一因である。どこまでをある一つの社会運動とするのかという問題は、資源動員論の中で議論されてきた。例えば、運動の共感者や良心的支持者は、そこに当てはまるのかどうかといった問題である (J. D. McCarty and M. N. Zald 1977)。社会運動論は、争議や直接的抗議といった可視化された運動に注意を向ける傾向にあったために、背後にある地道な活動をおろそかにしがちであった。そこで、「だめ連」において自分がメンバーであるかどうかは、ほとんど主観的な自認に過ぎないが、本稿では「だめ連」メンバーを傍観者や支持者を除いた「だめ連」の活動に主体的に参加する者を指す。「だめ連」全体を捉えるときには、運動のダイナミズムを損なわないために、周辺の関係者についても含めるものと定義する。

「だめ連」メンバーがどのような人たちであったかを特定するには、彼らが共有していた共通項を明らかにする必要があるだろう。まず、その世代と学歴について述べる。さらに「だめ連」の内部において、彼ら自身によりメンバーがいくつかのタイプに分類されているので、それについても併せて記述する。

1999年に出版された『だめ!』と『だめ連宣言!』に掲載されている「だめ連」メンバーの出生年の平均は、1967年である。掲載されているのは、「だめ連」の中でも中核メンバーであると言えるだろう。この中で、最も生まれの早い人は1940年生まれで、最年少は1975年生まれと年齢層は幅広い。しかしながら、最も人数が多いのは1960年代の後半から1970年代の前半に生まれた人たちである³。いわゆる「団塊ジュニア」と呼ばれる世代と、それより僅かに年上の世代を中心に構成されていたということがわかる。つまり80年代に青年期を経て、バブル真っ盛りの時代に就職した人たちと、バブル崩壊後すぐの就職氷河期に社会へ出るようになった人たちが活動の中心を担っていた。

その組織の名称とは裏腹に、「だめ連」メンバーは、大卒の資格を持っているか、

³出生年が掲載されているメンバーは、40年代が1人、60年代前半が7人、60年代後半が15人、70年代前半が10人、70年代後半が2人、80年代が1人となっている。

あるいは大学に在学中であった者が多い。しかも、学力水準の高い大学であることが、頻繁に見られるのだ⁴。さらに、ただ学力があるというだけでなく、小説を書く人や絵を描く能力がある人など、文化資本の高い人たちであることも特徴的だ。生まれ育った家庭に関する記述はそれほど多く残されているわけではない⁵。しかし、メンバーの多くが大卒者である事を考えると、「だめ連」メンバーは、ある程度経済的に余裕のある家庭であったことが推測される。

「だめ連」の活動を進めるに従って、「こころ系」と呼ばれる人たちが動員されるようになっていく。1998年8月の時点で「ここ二、三年くらいかな、だめ連かいわいに来るようになった人たちで、こころ的というか精神的キビしい人たちが、多くなったというか、そういう人たちがだめ連かいわいで中心的なメンバーといってもいいすぎないかなというぐらい」(神長恒一 1999a: 303)までに人数は膨れ上がっている。「こころ系」とは、躁鬱が激しい、被害妄想が甚だしい、自室に引きこりがちであるような人たちのことを指している。つまり、「だめ連」内で人とコミュニケーションを取ることに困難さを持つ人たちを意味した。90年代の半ばから、そのような人たちが「だめ連」へ多く動員されるようになったのだ。

それとは逆に、「だめ連」には「主体系」あるいは「野望系」といわれるタイプに分類されていた人たちが存在する。これに属する人たちは、「だめ連」の運動を率いていく意識を持った組織でのリーダーにあたる人、つまりは「だめ連」の中核メンバーのことを指し、「こころ系」や「だめ連」に遊びに来る人に対置されているのだ。後者の二つは、相手をしてくれる面白い人や居場所を求めた結果、動員された人たちなので、何か問題に対してアプローチしていく意識があるというよりも、居心地のよさや楽しさを理由として動員された人たちであるといえるだろう。

それらとは別に、「恍惚系」・「不安系」と呼ばれる区別も存在する。「恍惚系」は、平日昼間に働かずにぶらぶらしていることに対して快感を感じるタイプの人間を指す。逆に「不安系」は、働かずにいる現状と将来に不安を抱くタイプである。「こころ系」には分類されないものの「不安系」に属するものも多い。「恍惚系」と呼ばれ

4 創始者のペペ長谷川と神長恒一は共に早稲田の第二文学部を卒業している。(ペペ長谷川・神長恒一, 1999: 156)他にも「東京大学に入学した」(素伸乾一, 1999: 92)という記述がある。もちろん大学を出ていないメンバーもいるが、メンバーのうち一人は「だめ連の中核メンバーに僕らと同世代(三十歳前後)の高学歴者が多い」(窪田栄一, 1999)と率直に述べている。

5 神長は両親について「おふくろはパートでそうじのおばちゃんをやっていたんだけど、最近リストラされてしまった。おやじは「一流大学」から大企業にはいってサラリーマンをやってた人。」(神長, 2000: 100)と述べている。他にも「実家は医者をやっていて親戚もみんなそうだった」(素伸乾一, 1999: 96)、「酒屋と貸しビルやってたんです」(山口浩一, 1999: 108)「私の父は、元帝国大学の卒業生で某有名企業の社員である。」(桃山ペー子, 1999: 326)といった記述がある。

る人に関しても、必ずしも全く不安が無いというわけではない。

3節 「だめ連」の具体的な活動

独自の運動を行ったとされる「だめ連」は、どのような活動を行っていたのだろうか。「交流」と「トーク」が活動の中心であるということが、何度も言及されている。「交流」それ自体は単純に人と積極的に関わりを持つということであるが、「交流を通してつながりを広げていけば、もっと面白い関係のあり方や文化がきっとできていくはず。そして、そのつながりの中から、いろんなスタイルのアクティビズムが発生して社会に対してもいろんな提案ができるし、がぜん私たちの人生もオモロクなっていくはず」(神長 1999a: 317)だという意図のもとに行われた。「トーク」は、『とにかくお互いの人生について「だめ」について、いたずらに語り合うこと』と定義されている。特にトークの中では相手に喰い込むという表現がよく使われている⁶。単なるうわべのおしゃべりではなく、自身について真剣に話し、相手の話に向き合うことが重要視されているのだ。そして、特にトークのテーマに挙げられるのは、比較的日常的の身の回りにある問題についてである。「日常生活の中でのこと。仕事、性、恋愛、住まい、暮らし方あれこれというようなことを問題にするというスタイルだよ。今更あまりにもあたりまえすぎて、みんなが問わないこと、一もろん個人的には誰でも問題としてかかえているけれど、あえてそれを「しのご問題」とか、「嫉妬問題」なんてふうの問題化して語る」(小倉虫太郎・神長恒一・究極 Q 太郎・ひょうろく・ペペ長谷川, 1998, 158) のだ。

しかしながら、運動を始めた当初は、このような活動を意識的に行っていたわけではなかった。「発足当初のだめ連というのは、活動家の中のだめグループというものでした」(小倉虫太郎・神長恒一・究極 Q 太郎・ひょうろく・ペペ長谷川 1998: 262) と語っているように、「だめ連」は学生運動の組織として発足したのだ。「活動家のなかでも、頭が良くて、ばりばり出来てかっこいいみたいな、そういうのがやっばり一つのモデルになっていたわけじゃない。まあ、憧れるわけじゃない。そういう人がいつも、集会でもデモでも最先頭にたってやっている中で、我々はうだうだ、全然目立ちもせずにやっていた。」(小倉虫太郎・神長恒一・究極 Q 太郎・ひょうろく・ペペ長谷川 1998: 262)と述べている⁷。仕事を辞め、時間を持て余していた神

⁶ 「君は君で、僕は僕、みたいなのは、だめ連的にはあまりよいと思ってなくて、それだと人と会ったり、交流する意味がなくなっちゃう。いつに、眼の前にいる人に喰い込みたい、話しかけたいという気持ちがあります。」(神長恒一, 1999: 257) と述べている。

⁷ この先頭に立っていたとされる中でも代表格的な人物は、早稲田大学のノンセクトの中で当時スター的存在であった美津毅だとされている。美津のように主体的な学生運動家は学内運動に見切りをつけ学外へと活動の場を移していった。例えば当

長は、遊び相手を求めて大学へ戻り、ノンセクト系の学生運動に携わっていたペペ長谷川と再会する。二人はかつて、早稲田大学第二文学部の西洋文化専修というクラスで哲学を学ぶ同級生であった。再会後、共にノンセクト系、反天連系の学生らと共に勉強会やデモに広く参加するようになった⁸。「交流」と「トーク」は、初期の面白半分で左翼学生と付き合う楽しさの中から、次第に特別な意味を付され、明確な意図を持って実行されるようになったのだ。その中で、「だめ連」が生まれたのは、1992年5月の反PKO運動の時である。他にも山谷の炊き出しの手伝いを行ったり、在日外国人労働者の支援を行っていた通称「いのけん」(原宿いのちと権利をかちとる会)に参加したり、新宿駅西口の野宿者排除反対の運動に関わるなど、市民運動のような活動も行っていた⁹。

ただし、運動家の中の「だめなやつら」という意味合いだけで、「だめ連」の活動が始まったわけではない。「何かやりたいとか、ちょっと突っ張って生きてみたいとかいうムードがある中で、当時の大学には、いわゆる党派の政治があって、一方で、もっと緩やかに、みたいなことを言ってる市民運動のようなものがある、どっちも違う、と。だけど、それでも、運動であるかないか分からないような心気はあって、それを態度として出していきたい、という欲求は必然としてある」(ヒョウロク・ペペ長谷川・神長恒一 1998: 187)と述べている。また、「前衛意識をふりかざした旧態依然の左翼でいるわけにはいかなかったが、かといって大衆を無前提に是とするような類の大衆主義に陥ることは退行としかみなしようがなかった。だか

時の早大生であった辻元清美は日本侵略の跡地をめぐる「ピースボード」を始めている。早稲田と法政の学生運動は最近まで存続していたが、90年代の内実は内ゲバの延長と言えるものであったのだ。美津のような学生運動家への憧れと嫉妬を持ちつつも完全に学外へと足を踏み出せ無かったのが学生運動の中の初期「だめ連」ということになるだろう。(外山, 2010; 外山, 2008:80-81, 120-123)

⁸ 「学習会の合宿をやったり、スポーツ合宿をやったり。ものほんのどしどし系のデモにもよく行っていた。黒ヘルかぶって「天皇の訪中中止」とかジグザグデモして。会社を辞めて数カ月、気がつくと公安警察に写真を撮られる身分になっていた。」(神長, 1999b,159)

⁹ 「原宿・代々木公園の前にイラン人が集まって、日曜日だけコミュニティみたいなものを作ってたじゃないですか。床屋があつたりカセットテープ売つてたり、食事作つてたり、情報交換したりでいっぱい集まって」いた所で、「いのけん」は「出店みたいなを出してイラン人相手の労働相談みたいなのをずうっとやって」(神長 b, 1999, 161)いた。「だめ連」は警察によるその集まりの排除に対して「いのけん」と共に抗議行動を行った。当時新宿西口には多くの野宿者があり、武盾一郎がそのダンボールハウスに絵画を描いていた(武盾一郎・小倉虫太郎, 2007; 毛利嘉孝 2009: 145-157)。「だめ連」とも交流があり、その排除が1996年1月に行われた際に「だめ連とラスト庵の庵民なんかもね。この頃はそんなに頻りに新宿へ支援に行っていたわけでもないんだけど駆けつけた。(神長, 1999b: 179)」のである。

らわれわれは、まったく自分たちの状況にかなうような革命的スタイルを採用する必要性に迫られていた、と言えるのである」(究極Q太郎 1997: 129)とも述べる。衰退しきった学生運動でもなく、環境やジェンダーを扱う市民運動とも異なる形での運動を志そうとする思惑が、「だめ連」の発足に結びついていた。そのような意識が「だめ連」独特の運動スタイルを生み出していったのだ。

実際に、学生運動あるいは市民運動と別の形で何らかの動きを始めたのは、「わくわくバンド」からである。「わくわくバンド」は、楽器を全く演奏できない上に、歌も下手でまともに歌えないようなグループであった。メンバーすら集まらないので、偶然道であった友達を誘ってライブハウスに出ていたのである。「だめ連」では、このようなバンド活動やその他のイベントは、「だめ連」とは別の活動とされているが、実質的には「だめ連」の活動の一部としても問題ない。おそらく「だめ連」として固定化してしまい交流の幅を狭めていかないように、別活動として扱う必要があったのだろう。「わくわくバンド」は、何か主張を掲げて立ち上げたのではないが、脱力を表明する意図やバンドという意味を解体するような試みであったといえるのではないか。この活動が始まったのは1992年であり、「だめ連」としての芸術活動は、初期の学生運動組織として活動を行っていた時期から存在した。

1993年の春ごろから本格的に各種芸術活動が始まったとされている。その中で「現実実験演劇BIG座」という劇団を立ち上げているのだが、その説明は「子どもの「～ごっこ」をほうふつさせるへぼい劇団。「出会いのある演劇」「話しかける演劇」をテーマに、現実の変革(事件)たりうる劇的行為を、表現としてのうだつにとらわれないショボいレベルで目指した。」(だめ連編 1999b: 207)となっている。ほかに、「アンデパンダン音楽祭」「変態交流コレデイイノカ?美術展(反美術展)」「ペカソ百円展」など多岐にわたる芸術活動を展開していくようになる¹⁰。1992年時点では、交流の範囲は殆どが左翼系のイベントであったが、95年の12月ごろには「左翼系、思想系だけじゃなく、芸術系のイベによく行っていた。毎週土曜夜の岡画廊の定例会や、アングラ芝居、テント芝居、暗黒舞踏の公演。ローファイ系、パンク系ノイズ系ライブ、自主映画の自主上演会やポエトリー・リーディングのつどい、「東京ガガガ」などなど」(神長, 1999a, 179)に参加していた。しかし、そういった活動が多様になった中で、最も重要視されていたのは「交流」で

¹⁰ 「アンデパンダン音楽祭」は、初期の「だめ連」の音楽系イベントとして半年ほど続いた早稲田大学の校舎の屋上で観客も数名で、神長のステージは飲酒しながら箒を持ってギターの実似をして歌うというものだった。「変態交流コレデイイノカ?美術展(反美術展)」は、上野の国立西洋美術館で行われたバーンズコレクションの待機列と美術館の端で勝手に下手な絵を展示するという活動である。「ペカソ百円展」は、中野の路上で色々な人が描いた絵を100円で売るといった企画であった。(神長, 1999: 162, 166-167, 179)

ある。そもそもこのような活動は、目的なしに「交流」ばかりをするよりも、口実として何かイベントをすることによって、人を集めやすくするという理由で行われたものであった。他の団体のイベントに参加する際にも、イベント自体よりその後に行う「交流」を目的にしていたとされている。サブカルチャーとの繋がりが太くできたのは、このような活動の結果であった。その後「だめ連」の後期になってもある程度芸術活動は続いて行く。

1997年の11月には、「だめ系電話ネットワーク」が作られる。当時、神長恒一の自宅の電話は、「だめ連ホットライン」と名付けられ、活動の日程などを伝える窓口として機能していた。ところが、暇つぶしのために電話をかけて来る者が増えたために、その人たち同士で話し合いができるよう電話ネットワークが作られたのである。「その「イベント・ホットライン」に「こころ系」（この呼称自体にどうなのだろうか？）の人たちからの電話が殺到するようになっていった。」（神長, 1999a, 264）と述べられているので、実際に電話をかけてきていた者の多くは、「だめをこじらせ」してしまった人たちからの深刻な内容だったことがわかる。「だめ系電話ネットワーク」が作られたのは、「こころ系」からの「キビしい」電話が、神長ひとりの負担になることを避けることも目的としていた。このように、「だめ連」後期になるとセルフケアグループのような特色も増してくる¹¹。もちろん初期から全くそのような側面が無かったわけではないが、「こころ系」のメンバーが増える中で「だめ連」は、癒し合いの場として機能が強くなっていった。

4節 「だめ連」の思想

「だめ連」はどのような目標・思想を掲げていたのだろうか。「交流」や「トーク」を通じて「だめをこじらせ」ることを問題にしていたと既に述べたが、それではセルフケアグループと何ら変わるものではない。現在最も引用されている社会運動の定義は「共通の目的をもち連帯する人々による、エリートや敵対者、権威当局との間での持続的な相互行為の形態をとる集合的挑戦」(Tarrow 1994: 3-4)である。社会運動とセルフケアグループを分けるのは、その組織の集合的行為が外に向かって訴える意図があるかどうかという差なのだ。ただある組織が求心力を持ち、ある文化とは異なる文化実践をただ行っているだけでは、社会運動とは言うことはできない。特に明確に問題を掲げない「だめ連」のような運動では、実践そのものが運動であるとして言及されるが、少なくとも運動として始めた主体系メンバーには、

¹¹ それは例えば、「新興宗教、自己開発セミナー、蒸発、自殺……、だめをこじらせた人たちの選択肢がこれらのものばかりではキビシすぎます。(中略)もう少し他のオルタナティブな方法を模索してみることは有効なのではないでしょうか。」(神長, 1999: 3)とある通り、「だめ連」はセルフケアグループの代替の装置として並置されて捉えられている部分があることから窺えるだろう。

何かを社会に対して訴えようとする思想があるはずである。

まず、最も中心におかれているのは、「ハク」をつけ「うだつ」をあげることに大きな比重を置く生き方に疑問を投げかけることである。企業に就職し、出世していくことが当たり前の人生として語られる一方で、まともに就職しない人生は、悲惨な結末を迎えることと等しいかのように語られる。だから、そのような社会の中では、「だめ」なやつというレッテルを張られないために、私たちは必死に働き・消費することを強制されていると「だめ連」では考えられていた。真っ当な道から外れてしまった人は、「だめ」をこじらせ、追い込まれた状態になるというわけである。そういった高度成長時代の思考へ対抗して、「だめ連」は労働の拒否という思想を掲げていたのだ。「だめ連」が市民運動のような形で関わっていた活動では、野宿者や外国人労働者といった人々を援助していた。彼らは、社会で理想的とされる生き方をできなかった人々なのである。「だめ連」はそのような社会に対抗するために、オルタナティブな人生を模索するサブカルチャーグループとネットワークを作り上げ、生活を実験することで変革を目指そうとしていたのだ。「だめ連」メンバーの曖昧さも、この点から生じたのである。もちろん就職問題だけでなく、慣習的なジェンダー観、恋愛観、家族だけによって作られる家庭の在り方においても、それまで当然とみなされていたことに違和感を表明していた。

注意しなければならないのは、就職に関する問題に重点が置かれているものの、中心は労働問題としての側面であり、金銭的な側面は周辺に置かれていることだ。金銭の問題は「シノギ問題」として語られている。「だめ連」が提案する生活を送るために、どのようにして支払いを切り詰めていくのか、あるいは稼ぐことができるかが問題とされている。なるべく働かないようにして生活を続けることを問題にしているのであって、金銭を得ることが重要であるとは決してみなされていない。

それぞれの問題は当たり前を疑う姿勢から始まる。例えば、ジェンダーなら「男女間の友情」というバンドで恋愛しかないと思われていた男女関係を友達として捉えなおす曲を歌っている。また交流の中には新たな男女の主体像を模索するウーマン・リブ、メンズ・リブの団体が含まれていた。このような構築された様々な事柄を解体する姿勢は、フランス現代思想に通じている。実際に、「だめ連」メンバーによる論壇誌への寄稿や対談のなかには、ドゥルーズやガダリに関する話題が何度も取り上げられている¹²。また、95年の7月に始まった実践哲学の会で、ドゥルー

¹² 「その理論は、われわれにとって、なんの正当性ももたないと思われていた曖昧な多くの実践へ向けて経路するものとなったのは、「われわれは、どこかよそで起こったブームなどに触発されて、一挙にオルタナティブを会得したりなどできようはずもなかった」からであり、「旧態依然たるスタイルのまったくの機能不全ぶりを内心せせら笑いながら、それをどうにかしようとするのは面倒臭いので、それはそれで放っておき、無責任の誇りを受けるほどの身軽さにまかせ、生真面目な者ども

ズ＝ガダリの「ミル・プラトー」を取り上げていた。「だめ連」は、それまでの学生運動や市民運動が使用していた理屈に違和感を持つようになり、新たな運動の方向付けを模索していた。そこで、フランス現代思想と出会い、それを自分たちの運動の後ろ盾として、積極的に利用していったのである。

「だめ連」においての大きな活動の一つに「沈没家族」という活動がある。「沈没家族」は、メンバーの一人である加納穂子によって1995年に作られた共同保育のことを指す。活動内容は、子どもの世話を一家族だけでなく、他の家族と共に行うというものである。1999年には、母子三組と他の大人二人と共にビルを借りて住んでいる。その他にも居候が宿泊しにくることや、だめ連メンバーが子どもの世話をしに来ることが記述されている。もちろんこの活動は家族の在り方を問い直すものであるのだが、「相手との関係につかれたところもあったし、とっても、三人で暮らしていくこととかを考えると息苦しくて、安心とか安定とか言ってる場合じゃない。とにかく苦しい。それは相手が彼だからとだけでは言えなくて。そういう家族の閉塞感」(加納穂子, 1999, 147-148)と述べている。しかしながら、その直接的な理由だけでなく、共同で生活を営むことそれ自体にも重点を置いていたのではないだろうか。なぜなら、共同主義的な生活を重要視していたのは、「沈没家族」だけではないからだ。このことは、「だめ連」全体で広く共有されているのである¹³。生活そのものが運動であった「だめ連」では、実際に共に暮らすことで新たなライフスタイルの実践と提唱を行おうとしていたのだ。

2章 「だめ連」の広がりや衰退

94年の高円寺ラスタ庵での年越しではすでに50人ほどあつまり、2000年には「だめ連」界隈の人数は200人にまで上ったとされている(神長恒一・ペペ長谷川 2000: 57)。95年には、名古屋支部がすでにできていた。また、福島・広島にも支部があり、他にも地方にいくつかの支部ができるような動向があったようである(神長恒一・ペペ長谷川 2000: 124)。「だめ連」の活動が東京に留まることなく日本全国へ広がっていったことが分かるだろう。「だめ連」が、92年にたった2人から発足したことを考えると、その広がりや急速であったといえるのではないだろうか。この章では、その拡大と衰退に至る経緯を明らかにする。「だめ連」のような組織には、資源動員論をそのまま適用するのは難しい。なぜなら、運動から利を得ることや運動の合理性が、資源動員論で前提とされているだけでなく、人的資源

の網がまだ張られていない別の方向へ足を踏み出したのである」(究極 Q 太郎, 1997: 129)と言う。

¹³例えば、居住スペースだけでも、高円寺ラスタ庵、どくだみ荘があり、東大駒場寮とも深い関係にある。またダメメディアラボ、ヘーゼルナッツなどのフリースペースや居候など様々な形で共同性は主要な関心となっている。

を除くと「だめ連」にはほとんど資源と呼べるものが存在しないからである。本章では人的資源がどのように動員されたかということと、どのような組織形態を取っていたかということについて論じていく。

1 節 90年代前半の「だめ連」を囲む状況

「だめ連」発足の時代背景を捉えるのに、冷戦体制の終結は欠かすことはできない。第二次世界大戦後から1991年まで続いた、東西の冷戦が終わったことは、特に左派陣営にとって致命的であった。ピークを迎えた1968年以降も、時代変化や大学の制度変容があったにもかかわらず、学生運動は衰退しながら細々と続いていた。しかし、イデオロギーの不全が決定的になった東西冷戦の終結以降、学生運動はほとんど消滅してしまったのである(毛利嘉孝, 2009, 48-50; 93-96; 小倉虫太郎, 2006)。発足当初、「だめ連」は、弱体化した学生運動の残党として活動を始めたのであった。そのような左翼思想の衰退によって、彼らは従来の学生運動とは異なった運動を行っていくのである。

次に「だめ連」のような生活を送るためには、パートタイムの労働が必要となる。フリーターという言葉は、フリーランスとアルバイトをつなげた造語だ。フリーターは、定職に就かないで生計を立てる人のことを指す。ただし、学生や主婦のパート、契約社員等は含んでいない。今ではフリーターといえば非正規雇用で低賃金な状況に置かれた人という意味で否定的に捉えられることが多いが、90年代初頭にはフレックスな労働に従事する最先端の生き方として肯定的な見方がなされていたのである¹⁴。フリーターというあり方は、「だめ連」の生活スタイルそのものではないが、運動を続けるのに必要な条件であったことは間違いない。

しかし、フリーターだけが当時の新たな生き方としてあったわけではない。『現代用語の基礎知識』の1990年度版の付録であるにっぽん流行白書では、転職の項目で4つのタイプの働き方を紹介し、「石の上にも何年、というのが働く者たちの

¹⁴企業にあえて就職せずに自由な生活をすることや夢を追いかけてアルバイトをするひとというニュアンスがフリーターにはあった。会社を辞めてフリーターになった人物が「人生において、何を求めるかは、その人個人の問題である。なぜ、みんながみんな、仕事を通じての自己実現をめざさなくてはいけないのか。労働をメシの種と割りきって、商品と割りきって、必要最低限の労働力を買ってもらって、後は、自己実現のために使いたいと思うことが、なぜいけないのか。」と語っている。(「企業をやめてもどうにかなる(声)」『朝日新聞』1990年2月28日)また、「今すぐにも、ちゃんとした仕事に就いて、親を喜ばすことはできる。でも自分を偽ってでも親を安心させることが子供の人生のすべてだろうか。自分の思う道を進み、毎日、幸せでいることが、親孝行ではないだろうか。」とフリーター自身が語っている。(「自分の道を進むのが親孝行だと信じて(声)」『朝日新聞』1990年4月15日)

美学であった。しかし、現在そうした美学は失われこそしないが、仕事中心の人生設計をもたぬ人種が増えてきたのだ。」(松本直也 1990: 7)と述べている。高度成長期からバブルにかけて抱いてきた理想の生活への反動として、90年代に入ると、新しい働き方を模索するような言説が生み出されるようになったのだ。「だめ連」も、こうした動きの一側面であったとみなせるだろう。

バブル期の文化が、どのようなものであったかについて様々に議論されているが、象徴的な事例はブランドなどに代表される記号消費時代の到来や、大学でのサークル文化が花開いたことなどが挙げられる¹⁵。80年代のバブル文化を批判する言説は、「だめ連」の中でいくつも見受けられる¹⁶。熱く語ることが恰好の悪いことだとする風潮に対して、特に強く反発しているのだ。80年代の態度や考え方への反発が、「だめ連」の思想を作り上げるのに大きな影響を与えたのである。

2節 90年代前半のミクロな誘因要因と組織

「だめ連」の広がった原因を考えるためには、どのようにしてメンバーが、運動

¹⁵ バブル経済が実際に訪れたのは1985年以降のプラザ合意以降である。しかし、女子大生の華やかな生活を描いた田中康夫の『なんとなく、クリスタル』が1981年に出版されたことを考慮に入れると、バブル文化は80年の初頭から広がりを見せていたと言える。近年になって80年代文化に関する書籍がいくつか出版されたが、村田(2006)がスカだったとされる一般的に浮かれたバブルのイメージを持った80年代論であったならば、香山(2008)や宮沢(2008)は日本で初めてのクラブである「ピテカントロプス・エレクトス」やビックリハウスといったサブカルチャーの側面を描いている。80年代にも文化の階層が様々にあったことには注意すべきである。ただし、例えばニューアカブームについて村田(2006: 147)は「教養や知識は「明快」かつ「軽くスピーディーに」商品化されていった。こうした傾向を一九八三年の流行語で表現すれば、人々は「頭がウニになる」状況にもかかわらず、「おもしろまじめ」に「軽薄短小」を追求していたわけである。」とする。宮沢(2008: 68)でも、「とにかく80年代全般を見渡して感じるのは、ある種の清潔感というか・・・乾いたものとか、冷めたものとか、そういうもののほうに意識が向いていたと考えられます。」と述べられている。つまり、80年代の文化はサブカルチャー全体においても軽薄さや冷たい態度という共通点を持っていたと言えるのだ。

¹⁶ 例えば、「BIG座」の第二回公演に関してペペ長谷川は「私は「ニヒった男の役をやりたい」って言って。やる気のある人が出てくるとクサすような、そのくせ私生活は姑息に充実させてる、そういう役。そいつがだんだんキビシクなってくる。最後、「俺はニヒってたけど間違ってたのか」(笑)「俺はアツク生きたいんだ本当は、あのジョン・トラボルタのように」(笑)って絶叫。」とその内容を語っている(ペペ長谷川, 1999: 165)。他にも、「それとあの当時「an・an」「non・no」「Hot・Dog PRESS」田中康夫の『なんとなくクリスタル』とかテニスサークルとかトレンディードラマとか流行ってて、そういう風潮に対するアンチテーゼみたいなものを持ってたんだ。」(堂前健一, 1999)という発言もある。

へ動員されていたのかを知らなければならぬだろう。まず最初に挙げるべきは、「交流」そのものだ。初期の「だめ連」は、ノンセクト左翼系の学生運動グループとの「交流」が中心を占めていたので、「だめ連」自体が他の運動団体の活動に参加させてもらっていたと言う方が正しいかもしれない。1992年の末ごろに、行われた「だめ連」の会議にはまだ3、4人しか参加していない。このころはまだ「だめ連」ネットワークを広げる下準備段階であったと言える。

それから次第に「交流」のための独自イベントを始めるようになり、次第に参加者は増えていく。「だめ連」が主催した最初のイベントだと言われている1993年7月の就職問題シンポジウムには、30人以上の人が集まった。その様子を収録したミニコミ「にんげんかいほう（27年の孤独）」が、同年の10月に創刊される。当時、ミニコミはサブカルチャーの中で重要な役割を果たしていたようだ¹⁷。

「ロケット」というミニコミで「だめ連」の存在を知り、後に「だめ連」と関わることになった「ダメディア・ラボ」という団体は、「だめ連」のホームページを作るようになっている。またミニコミ「すもうチョップ」の主催者と知り合い、そのついで「だめ連」のイベントに参加するようになったメンバーもいる。1996年には東京ミニコミ交流会が開催され、「だめ連」も参加した。そこで参加していた団体のほとんどが、オルタナ左翼系、アート系であったとされている（だめ連編 1999b: 210）。このように、サブカルチャーの団体や運動組織のネットワークは、ミニコミを通じて広がっていた。組織間や運動に関心のある個人がコミュニケーションをとることを、ミニコミは可能にしていたのである。

ミニコミのネットワークは、広域での影響も及ぼすことができたようだ。「にんげんかいほう」で食べ物のカンパを募ったところ、ある程度の反応があったという。当然のことながら、90年代半ばになると、日本全体の文化的な均質化が、かなり進んでいたはずである。九州を中心にアナーキスト運動を行っていた外山恒一は、1995年に「だめ連」に出会い、大きな影響を受け実質的に「だめ連」福岡支部のトップとなった人物である。彼は地方にカウンターカルチャー存在しないことを語っている。サブカルチャーといっても「ロッキン・オン」などの単にメイン文化でないという意味でのサブカルチャーは存在したが、上に挙げたようなミニコミを取り扱う書店は存在しなかったのだ（外山恒一，1999）。つまり、ミニコミのネットワ

¹⁷当時「だめ連」以外にも様々な団体が、ミニコミを発行していること確認できる。「だめ連」と関連があり直接言及されている団体のものだけでもBIG座の「BIG座新聞」、団体名をそのままつけた「アナーキスト・インディペンデント・レビュー」、インターネット通信ネットワーク団体の「放射性れんこん」、「パーティーマニア」など少なくとも確認できる10以上は存在する。このようなミニコミは、現在でも営業している模索舎、タコシェ、フジヤマといったインディーズ音楽の音源や雑誌を取り扱っていた書店で販売されていた。

ークだけでは、全国をカバーし、後期の「だめ連」のように一般の人たちを新しく動員させるほどの要素にはなりえなかった。80年代末の反天皇制運動である「秋の嵐」や反管理教育運動を熱心に行っていた外山だからこそ、「だめ連」の存在を知ることができた。そこから言えるのは、何らかの運動に関わっているか、サブカルチャーに特段の関心があった上で、なおかつ首都圏にアクセスすることのできる人以外を動員することは難しかったのだ。

こうして集まった人たちはどのように「だめ連」を組織したのか。初期に「だめ連」の周辺にいた人は、「私はだめ連ではない」と言いつつも、「だめ連」のイベントへ次第に統合されていったという。なぜ「だめ連」と自称しないのかというと、学生運動崩れの人達を中心に、自分が「だめ」であると認めたくないという「うだつ」の心情があったからである(マオ, 1999, 251-254)。秩序だった組織を形成せずに、交流という不明瞭な形でネットワークを広げたからこそ、様々な考えを持った人達を別のアイデンティティに留めたまま、「だめ連」の活動に動員させることができた。オルタナティブ系左翼やサブカルチャー組織の媒介として「だめ連」は存在したのだ。

3節 90年代後半の「だめ連」

95年は時代の転機として近年注目されるようになった。オウム真理教サリン事件や阪神淡路大震災という大きな事件が起こったからである。それまでまだ引きずっていたバブルの余韻は失われ、一気に不況ムードが押し寄せることとなった。宮台真司は、97年の神戸連続殺傷事件や援助交際が社会問題化された際に、コメンテーターとしてマスメディアで活躍した。その当時彼は、「まったり革命」を主張していた。「まったり革命」とは、成熟社会に至った日本で若者が意味を求める生き方を辞めて強度を求めて生きるようになるだろうという変化を指している(宮台 2002: 243-250)。マスメディアが「だめ連」を取り上げたのは、このような新たな変調の兆しを、彼らに見出していたからなのである。

マスメディアに取り上げられるようになることで、「だめ連」を囲む状況は大きく変化する。「だめ連」が初めて新聞に取り上げられるのは、1998年1月8日の朝日新聞である。それ以降、朝日新聞に13回、毎日新聞で11回、読売新聞では計3回に渡って、「だめ連」という単語が使われている。年度別にみると1998年に3回、1999年に15回、2000年に6回、2004年・2005年・2008年にそれぞれ一回ずつ記事になっている。1998年ごろから徐々に認知されるようになり、1999年・2000年に最も盛り上がった後、だめ連そのものに直接言及する記事は次第に減るが、2001年以降も「だめ連」という単語は使われている。「だめ連」が主催していた活動は2000年以降しだいに行われなくなっ

だが、創設者のペペ長谷川は今でも「だめ連」を自称し、活動している¹⁸。テレビに頻繁に取材されていたのも1998年から2000年のあいだだろう¹⁹。「だめ連」が最初にマスメディアに登場するのは、1995年の3月1日に発刊された週刊金曜日の記事である。それ以降、「だめ連」は、しばしばマスメディアに関わっていた。「だめ連」がマスメディアに露出するにつれ、より多くの人々が動員されていくようになったのだ。

しかし、00年代以降「だめ連」それ自体の活動は徐々に停滞していく。2002年の6月を最後に、ホームページの「だめ連」イベントの告知は無くなるのだ。また2006年の4月29日の更新以降、だめ連境界のイベントを自由に投稿する掲示板も閉鎖されている。ホームページ自体も2008年の6月16日の更新を最後に閉鎖した²⁰。なぜ「だめ連」の活動は衰退していったのであろうか。「だめ連」はマスメディアによって拡大したが、衰退した原因もその点に求められるのではないだろうか。

三章 「だめ連」とマスメディア

マスメディアで「だめ連」は、どのように語られていたのだろうか。「だめ連」が、どのような団体であるかということについての説明は、現実と大きく異なるものではなかった。「だめ連」は、ハクのつけあいに終始する競争社会の論理を持たず、「まったりとした生き方」を認め合い交流しようとする集団ということで一致している。しかしながら、注目すべきは、「だめ連」の扱われた記事が、どのように「だめ連」の解釈を行っていたのかということだ。例えば、「ひきこもり」や「不登校」、「カウンセリング」、「パラサイトシングル」、「無職男」といった言葉とともに「だめ連」は描かれている。つまり、90年代後半に問題となった様々な若者のあり方の一側面として、「だめ連」が並置されていたのである²¹。特に、精神的な異常が原

¹⁸ 松本哉(2008: 169)では、「だめ連」としてペペ長谷川を紹介している。

¹⁹ NHKのドキュメント「青春探険」やテレビ朝日の「ビートたけしのTVタックル」、フジテレビのドキュメンタリーで「沈没家族」が取材されていることが分かっている。前者の2つはヒョウロク・ペペ長谷川・神長恒一(1998)に、ドキュメントについては「第七回 FNS ドキュメンタリー、大賞は「30年目のグレーゾーン」に――31日放送」(『毎日新聞』1990年1月19日)にそれぞれ言及されている。

²⁰ Internet Archive(<http://www.archive.org/>)で「だめ連」の閉鎖されたホームページ(<http://www.ne.jp/asahi/r/s/dameren/>)の一部を確認できる。

²¹ 「定職に就かず、世間的にはウダツが上がらない存在として孤立しがちな「だめ」同士が、ハクのつけあいに終始する競争社会の論理が支配する場所とは違うところで、「まったりとした生き方」を認め合い交流しよう、という提案だった。」と「だめ連」を紹介する同記事に、現代の病理として社会的ひきこもりが「健康と思えるのに、まったく外に出ていけない。人づきあいに自信が持てない。他者と接して傷

因である問題と併せて、「だめ連」は語られているのだ。実際には社会運動であったにもかかわらず、マスメディア上では若者の病理として取り上げられたのである。実際に、マスメディアを通じて「だめ連」を知った後に、「だめ連」の運動へ参加した人たちは、「だめ連」が実際には「だめ」では無かったとしばしば語ったと神長は明らかにしている。新しい文化を作るという「だめ連」の重要な問題に触れている記事は、彼らによって編集された書籍を除くとわずかである。「だめ連」は、社会不適合な若者が集まって共同生活を営んでいる団体であるという印象をマスメディアは広げたのであった。

そのような情報に接触し「だめ連」に動員された人たちは、それまでのメンバーとは異なっていた。マスメディアに取り上げられるようになってから、「だめ」ということに反応して、更に「だめ」な人たちが集まってきたという(神長 1999a: 264)。その人達が、精神的にキビシい状態に追い込まれた「こころ系」の人たちだったのである。上でも述べたとおり、マスメディア上での「だめ連」は高度成長社会モデルに馴染めない若者の集団であるという解釈だったために、引きこもりヤリストカットを繰り返す人や躁鬱を患う人たちが動員されることになったのだ。それまでの「だめ連」は、新左翼の残党が中心となって運動組織として作り上げられていたのに対し、マスメディアを通じて参加するようになった人たちは、自分自身を「だめ」だと自称する人たちだったのである。「こころ系」の人への対策として作られた電話ネットワークは、1997年の10月ごろであり、マスメディアに「だめ連」が露出し始める時期と一致する。マスメディアによって生み出された「だめ連」の解釈の違いは、どのような影響を運動組織に与えるだろうか。

解釈の差は、「こころ系」の人達と「主体系」の人たちで異なる集合的アイデンティティを形成させることになった。つまり、前者は、「だめ連」が癒しの場であると考え動員されてくるのに対し、後者は社会運動として「だめ連」の提唱する生活をしていると考え動員されているのだ。この解釈の違いには、埋めがたい溝が存在する。なぜなら、運動であるか／ないかという違いは、社会運動組織の存在そのも

つくのを恐れて、自宅にこもる――。学校に行かず、働かず、恋もせず、焦燥感にさいなまれて孤独な長い時間を生きる、そんな若者が増えているという。」と問題化されている。(「ひきこもり 時代の病理を映す「孤独」(探険キーワード) 『朝日新聞』1999年4月24日)また、「無職の若者たちが「うだつを上げなくてなぜ悪い」と開き直って結成した「だめ連」のような活動が目されるのも、戦後、アクセル全開で頑張ってきた日本社会が休息を必要としているからかもしれない」と考察する一方で、「都会の真ん中に住んでいてもこうなのだから、まして近隣関係が濃密な地域であれば、なおさらプレッシャーはきついはずだと思う。「ひきこもる若者」「パラサイト・シングル」「無職男の犯罪」.....そんな言葉を見るたび、プレッシャーは強まっていると感じる。」という文章も見られる。(「パラサイト男の哀しみ ひきこもり百万人説」『AERA』2000年2月28日号)

のに関わるからだ。一元的な集合アイデンティティの解体は、組織が運動を続けることに困難を生じさせる。とりわけ、「だめ連」のような明確に主張をしない運動組織にとっては、集合的アイデンティティそのものが運動のリソースとなっている。このような両者の齟齬が「だめ連」の解体につながったのである。

マスメディアは、議題設定機能という効果を持つ。議題設定機能とは、私たちが何について考え、議論すべきなのかということを決めることを意味している(Weaver, 1981)。様々なマスメディアに取り囲まれた私たちは、それらによって現実社会で何が問題となっているかを認識しているのだ。だから、社会運動にとって、メディアに取り上げられることは、社会に運動の掲げる問題へ関心を向けさせるための大きなリソースになる。しかしながら、その報じられ方によって、運動を隆盛させるだけでなく、運動を抑制させることもあるのだ。メディアのフレーミングによって、社会運動にもたらす影響は、大石裕(2007)で議論されている。「だめ連」の場合、「社会に不適合な若者の集団である」というメディア・フレームは、人的資源の動員と集合的アイデンティティの解体という二つの側面で影響を与えていたと言えるだろう。

4章 社会運動の中の「だめ連」

これまで、「だめ連」についての解釈と運動の発生から衰退に至る過程、そしてマスメディアが「だめ連」に与えた影響について述べてきた。「だめ連」が学生運動から始まった事実は、その土壌を作り上げたという意味では重要である。しかし、学生運動がその活動の本質であったとは言い難い。一般的な運動のイメージとはかなりかけ離れた「だめ連」という運動は、社会運動の文脈の中でどのように位置づけ出来るだろうか。

まず、伝統的な左翼運動とは明らかに異なる。決してマルクス主義革命を目指している訳ではなかった。そもそも働くこと自体を拒否しているのが、労働者運動ですらないのである。メンバーが個人としてデモに参加したという記述は見られるものの、「だめ連」としてデモを起こしたことはない。高度成長社会の理想的な生き方を否定する態度を取る方法として、デモは決して合理的な手段ではなかったのだ。

市民運動と「だめ連」の違いはどこにあるのだろうか。「①「国民」概念に還元されない、②「階級」概念に還元されない、③大衆民主主義に基盤をもつ」(長谷川公一・町村敬志, 2004) ことが市民運動の基底であると言える。特に戦後から80年代まで盛んであった市民運動の特徴は、環境問題あれ反核運動であれ、法的手続きを通じて問題を解決しようとする傾向が強いことだ。フランスの緑の党が連立与党政権を組んだように、体制側との争議を必ずしも前提とはしなかったのである。「だめ連」にとってそれらの運動は、上で見たように市民を無前提とする市民運動であったといえる。なぜなら、90年代には社会から「市民」と見なされなかった

人たち、例えば在日外国人や野宿者といった人に、市民運動はほとんど目を向けなかったからだ。そして、「だめ連」は、行政に要求を突きつけるのではなく、自分たちで自身の主張を実践することによって、社会に問いかけることを選んだのである。「だめ連」は市民運動として位置づけることはできない。

一方で、「だめ連」を語られる際に良く引き合いに出される運動がある。それは、ヒッピームーブメントとアウトノミア運動である。ヒッピームーブメントは、1960年代後半にアメリカで起こり、日本ではその影響を受けて「フーテン族」が現れるなど、世界中に広く影響を及ぼした。1969年のウッドストック・フェスティバルが象徴的な出来事とされている。確かにヒッピーは「だめ連」のように企業に入って働かず、ヒッピー同士の共同体を作って生活をした。しかし、あくまでそれは訴える形式が似通っていたというだけで、掲げた思想は全く異なる。ヒッピーは人間性の回復を求めて「自然に帰れ」という標語を掲げたのだ。だからこそ薬物や神秘宗教などが利用された。「だめ連」では、人間性を取り戻すことを主張されたわけではない。

「だめ連」は、後者の「アウトノミア運動」と親和性が高い。アウトノミア運動は1969年からイタリアで始まった運動で、1977年に最も盛んになった運動である。スクワットハウスと呼ばれる空き住居の占拠、自分達でメディアをもつという自由ラジオなどの活動が特徴的であった。何といたっても労働の拒否はアウトノミア運動の根幹を成す思想であった。しかしながら労働の拒否の思想は「だめ連」のものとは異なる。それはオートメーション化による疎外とサービス産業による精神労働の発達に抵抗するものであったのだ。だから、ここでも人間性の回復が焦点だったのである²²。

社会運動としての「だめ連」の特殊性は、時代背景に拠る所が大きい。つまり、「だめ連」の掲げた「ハク」や「うだつ」を追い求める高度成長期のライフスタイルへの抵抗は、日本の90年代に特有の状況から生み出されたのである。一億総中流神話が崩れ去り、このライフスタイルの自明性を失った状況が「だめ連」の素地となったのだ。「だめ連」という運動は、弱体化しながらも残り続けたノンセクト系・アナーキストの学生たちが、それまでの運動に見切りをつけ、ポストモダン思想を背景に、当たり前として受け入れられていたライフスタイルへ疑問を投げかけた社会運動組織なのであった。

「だめ連」が、社会運動に残したものは何であろうか。「だめ連」としての活動が行われていない現在でも、神長恒一とペペ長谷川は運動家として生活を続けている。また、「だめ連」界限の人たちが中心となって作った交流イベントスペース「あ

²² アウトノミア運動に関しては Franco Berardi (Bifo)(1997)、小倉利丸・小倉虫太郎・酒井隆史(1998)、上野俊哉(1998)を参考のこと。

かね」は現在でも営業を続けており、現在の若者が担う運動に深く関わっている。「だめ連」と入れ替わるようにして生まれたのが「素人の乱」であった。「素人の乱」は松本哉、二木信、山下陽光らが中心となって高円寺で始まった運動である。元々は山下陽光が始めた web ラジオのタイトルを、そのまま松本哉がリサイクルショップの名前につけたことから始まった。松本はもともと法政大学で「法政の貧乏臭さを守る会」という学生運動を行い、その後も「貧乏人大反乱集会」を行っていた。「素人の乱」の活動は、「俺のチャリ返せデモ」や「家賃をタダにしろデモ」と名付けられたデモが、中心的な活動として述べられている²³。「素人の乱」や若者を中心に行われているデモが、新しいと見られている理由は、その方法が伝統的左翼や市民運動とは異なるデモのスタイルであるからだ。例えば、デモカーにサウンドシステムを積んで行うサウンドデモや、神輿を担いでのデモが特長的である²⁴。

「素人の乱」は明らかに「だめ連」からの影響を受けている²⁵。しかしながら、注目すべきことは、「素人の乱」の掲げている思想だ。松本は、企業で働かないような現在の生き方をサブカルチャーとしてではなくメインカルチャーとして捉えたいという。そのスタートがリサイクルショップを始めたことであったことを考えると、「だめ連」が掲げた労働の拒否とは異なる姿勢であると言えるだろう。具体的にその生活とは、「貧乏な生活」であるのだ。しかし、お金がそれほどなくても働いて生きていくということと、なるべく働かないで生きていくということには大きな開きがある。「だめ連」がよりラディカルな主張を掲げられたのは、90年代後半の経済状況が、2000年以降よりも遥かに良かったからだ。

2000年以降の運動の争議スタイルが、毛利の言うような左翼のパロディであることもそのことを象徴しているように思われる。「だめ連」の場合、生活すること自体が闘争のスタイルであったのだが、「素人の乱」ではデモも主要なスタイルとして用いられているのだ。「だめ連」は、社会の経済構造によって抑圧されているという左翼的な主張をしなかったが、「素人の乱」は抑圧している者に対する階級闘争を若者運動に再び持ち込んだのである²⁶。このことは、現在行われている他の若者による

²³ 「素人の乱」の活動については、松本哉・二木信(2008)、松本哉(2008)に詳しい。

²⁴ ただし、音楽で主張する方法がそれ以前に無かったわけではない。例えば1969年に発生した新宿フォークゲリラや80年代後半のACF(アトミック・カフェ・フェスティバル)が企画した反核の音楽イベントなど実際には比較的長い歴史があるといえるだろう。

²⁵ 松本哉が杉並区議会選挙に出馬した際にはペペ長谷川は司会として招かれている(松本哉, 2008: 169)。創始メンバーの一人である山下は「だめ連」とは知らずにその交流会や関連する芸術活動の「岡画廊」に参加していた(松本哉, 2008: 19)。

²⁶ 若者の雇用不安は全世界的な傾向であるようだ。例えばイタリアの26歳の女性は「みな親たちの資産、保護で何とか生きている。私の年か少し上で、家のローンを組める定職のある人を1人も知らない。」と語る。(「ローマでおしゃべり 若者編……

デモにも同様に言うことができる。2010年の勤労感謝の日である11月23日に行われた「就活どうにかしろデモ」や2006年から始まった「自由と生存のメーデー」は、彼らが新たな文化の創造であると主張しているとしても、抑圧する社会を改善し、私たちが社会に包摂させることに重点を置いているのである。彼らの主張や方法は、明らかに労働者運動の系譜なのだ。

おわりに

「だめ連」は、大衆を前提とした運動を目指したが、現在の運動と比べると、90年代という恵まれた状況下で、高等遊民たちが独特の生活を送っていただけのように見えるかもしれない。しかしながら、だからこそ「だめ連」はラディカルな運動を起こすことが可能であったのだとも言えるのだ。その形式は、後の運動に大きな影響を与えたと言えるだろう。しかし、「だめ連」の思想は、現在の若者による運動とは大きく異なる。現在の若者の運動に関する研究はごくわずかであるが²⁷、「だめ連」を通じて、それらの諸現象が根本的には労働運動であり、そこに参加する若者が社会的に包摂されることへの高い欲求を持っていることを理解できるだろう。現在の若者は、「だめ連」が疑問に付した高度経済成長期のライフスタイルモデルを果たして乗り越えようとしているだろうか？私たちは、いまだにそのパラダイムの中で思考し続けているのではないか。日本が今後の低成長時代を迎える中で、考え直さなければならない問いを「だめ連」は発しているのである。

参考文献

- 雨宮処凛, 2010, 『反撃カルチャー』角川学芸出版。
雨宮処凛, 2008, 「思想よりもノウハウを」『論座』(163): 68-69。
浅尾大輔, 2007, 「失われた連帯を求めて」『論座』(150): 63-73。
(Bifo), Franco Berardi, 1997, *Dell'innocenza. 1977: l'anno della premonizione*, Ombre Corte. (=廣瀬純・北川真也訳, 2010, 『N O FUTURE』洛北出版.)
Melucci, Alberto, 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, John Kean and Paul

①『毎日新聞』2010年8月10日)また日本語のparasite・シングルと同等の意味を示すイタリア語の「バンボッチョーニ」や英語の「キッパーズ」という言葉が生まれている。(斎藤環「時代の風：日本化する世界」『毎日新聞』2010年3月7日)先進国に共通する構造的な問題であると言えるだろう。

²⁷小熊英二(2007)は、昨今のデモにかんする歴史的な位置づけを試みている。また、寺師・河島(2007)でサウンドデモのフィールドワークを行っている。

- Mier. (=山之内靖・喜堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民
——新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.
- だめ連編, 1999a, 『だめ連宣言!』作品社.
- だめ連編, 1999b, 『だめ!』河出書房新社.
- 長谷川公一・町村敬, 2004, 「社会運動と社会運動論の現在」『社会運動
という公共空間』成文堂, 1-24.
- 平井哲夫, 1999, 『だめ!』河出書房新社, 36.
- ヒョウロク・ペペ長谷川・神長恒一, 1998, 「だめ」を生きる、は運動か?」『情況』
第二期 9(6): 184-189.
- 伊藤るり, 1993, 「〈新しい社会運動〉論の諸相と運動の現在」『岩波講座 社会科学
の方法 VIIIシステムと生活世界』岩波書店.
- 梶田孝道, 1988, 『テクノクラシーと社会運動』東京大学出版: 177-213.
- 神長恒一, 1999a, 『だめ連宣言!』作品社.
- 神長恒一, 1999b, 『だめ!』河出書房新社.
- , 2000, 『だめ連の働かないで生きるには?!』筑摩書房.
- 神長恒一・ペペ長谷川, 2000, 『だめ連の働かないで生きるには?!』
筑摩書房.
- 神長恒一・ペペ長谷川, 1999, 『だめ!』河出書房新社.
- 加納穂子, 1999, 『だめ!』河出書房新社.
- 片桐新司, 1990, 「資源動員論から運動の総合理論へ—知識社会学的観点
からの一考察—」『社会運動論の統合を目指して』社会運動研究会
編, 29-56.
- 香山リカ, 2008, 『ポケットは90年代がいっぱい』バジリコ株式会社.
- 究極Q太郎, 1997, 「群れになるべし」『現代思想』25(5): 128-143.
- 窪田栄一, 1999, 「だめ連という衝撃」『だめ!』河出書房新社: 236-237.
- J. D. McCarthy and M. M. Zald, 1977, "Resource Mobilization and
Social Movements: A Partial theory", *American Journal of
Sociology* (片桐新自訳, 1989, 「社会運動の合理的理論」『資源動
員と組織戦略』新曜社: 21-58.)
- 松本哉, 2008, 『貧乏人大反乱』アスペクト.
- 松本哉・二木信, 2008, 『素人の乱』河出書房新社.
- 松本直也, 1990, 「ある若者たちの転職日記」『現代用語の基礎知識 1
990年度版 別冊付録 につぼん流行白書』自由国民社.
- 宮台真司, 2002, 『これが答えだ!』朝日文庫.
- 宮沢章夫, 2008, 『東京大学「80年代地下文化論」講義』白夜書房.
- 毛利嘉孝, 2009, 『ストリートの思想』NHK出版.

- 村田晃嗣, 2006, 『プレイバック1980年代』文春新書.
- 小熊英二, 2007, 「戦後日本の社会運動」『論座』(150): 80-91.
- 小倉虫太郎, 2006, 「大学の廃墟で—80年代の個人的な経験」『ネオリベ化する公共圏』明石書店: 114-125.
- 小倉虫太郎・神長恒一・究極Q太郎・ひょうろく・ペペ長谷川, 1998, 「主体の後にはだめ連が来る」『現代思想』26(12): 257-269.
- 小倉利丸・小倉虫太郎・酒井隆史, 1998, 「アントニオ・ネグリとは誰か」『現代思想』26(3): 70-80.
- 大畑裕嗣, 2004, 「モダニティの変容と社会運動」『社会運動という公共空間』成文堂: 156-189.
- 大石裕, 2007, 「メディア・フレームと社会運動に関する一考察」『三田社会学』(12): 19-31.
- 塩原編, 1989, 『資源運動と組織戦略』新曜社.
- 素伸乾一, 1999, 『だめ!』河出書房新社.
- Tarrow, 1994, *Power in Movement: Social Movements, Collective Action and Politics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 寺師正俊・河島茂生, 2004, 「サウンド・デモ」『路上のエスノグラフィー』せりか書房: 189-205.
- 外山恒一, 1999, 「地方のカウンターカルチャーはいま」『だめ連宣言!』作品社: 371-375.
- , 2008, 『青いムーブメント』彩流社.
- , 2010, 「ガラパゴス諸島の闘争」『ポスト学生運動史』彩流社: 7-34.
- 上野俊哉, 1988, 「アウトノミアからアクティヴィズムへ」『現代思想』26(3): 206-218.
- Weaver, David H., Doris A. Garber, Maxwell E. McCombs and Chaim H. Eyal, 1981, *Media Agenda-Setting in a Presidential Election: Issues, Images, and Interest*, Praeger. (=竹下俊郎訳, 1998, 『マスコミが世論を決める——大統領選挙とメディアの議題設定機』勁草書房.)
- 山口浩一, 1999, 『だめ!』河出書房新社: 108.